

フランス語動詞事象の意味分類に関する考察

Quelques réflexions sur l'analyse des prédications du français

平 嶋 一 美
HIRASHIMA Hitomi

La classification de verbes proposée par Z. Vendler se sert largement de la grille d'analyse de verbes français. Mais le réexamen de sa théorie montre quelques problèmes méthodologiques: ambiguïté de la notion utilisée pour la catégorisation, tests de compatibilité peu distingués de la définition des catégories, et le désaccord entre l'objet et le niveaux d'analyse. Inspirées du travail de Vendler, les recherches consacrées à l'analyse des prédications du français essaient de reformuler sa théorie. Ainsi chaque catégorie sémantique se définit-t-elle comme un ensemble de caractéristiques sémantiques. Les tests de compatibilité ont pour fonction de déterminer la classe sémantique de verbes en examinant la compatibilité ou l'incompatibilité de la(des) caractéristique(s) sémantique(s) de ceux-ci avec les traits sémantiques des termes utilisés pour les tests. On constate enfin l'objet d'analyse qu'est le procès de l'énoncé, c'est à dire la signification de la phrase entière mise en contexte. Ce dernier constat nous amène à remarquer que le type de procès est le résultat de divers indices linguistiques et énonciatifs.

キーワード

共起テスト = test de compatibilité, 意味特徴 = caractéristique sémantique, 動詞句 = prédicat, 発話 = énoncé, 事行 = procès

0. はじめに

動詞は名詞とともに文を構成する中心的要素として広く研究対象となってきた。動詞の役割は活用によって主語の人称や数を明示したり、文の中核として主語、目的補語等を統合するだけではない。動詞の意味は他の要素の意味とも深く関わっており、しばしば他の要素の意味を特定するマーカーとしての役割を果たす。例えば半過去形の意味の効果 (effets de sens) は時制形自体の意味と動詞 (句) のアスペクトの意味との相乗効果によって生み出されることはよく知られている¹⁾。また *encore* のような若干の副詞の用法と動詞句の意味には相関関係があることも報告されている²⁾。これらのことを考慮すると、深く言語事象を理解するために動詞の意味を分析する意義は大きい。

動詞の意味はこれまでに様々な方法論で分析されてきた。J. François et L. Gosselin (1991)によれば、主として動詞事象を状態と出来事に大別して分析する方法と、この二つに事象における行為項の関係を交えて分析する方法に分けられるという³⁾。前者の方法論を用いた研究の代表は Z. Vendler (1967) であり、後者については W. Chafe (1970)⁴⁾ があげられる。Vendlerの研究は英語動詞の分類を試みたものであるが、動詞を状態、活動、完了、瞬間の4つに分けるその方法は現在ではフランス語の動詞分類にも広く用いられている。しかし、分類枠の知名度に比べると彼が分析に用いた方法論そのものは以外に知られていないように思われる。本稿は Vendler の動詞の意味分類を紹介し、その後の研究によってその方法論がどのように再検討され、フランス語動詞事象の意味分析が発展してきたかを考察するものである。

1. Vendler の動詞分類

Vendler の研究はしばしばアスペクト的動詞分類と呼ばれるように、彼の目的は英語の動詞が表す内的時間の性質を図式化することにあった。分類の軸になるのが現在進行形と呼ばれる *be+ ~ ing* との共起関係である。Vendler はまず *be+ ~ ing* と共起するか否かを基準に英語動詞を2つのグループに分ける。*What are you doing?* という質問に対し *I am running (writing, working, etc.)* のような答えが可能となる動詞は共起するグループに属し、進行 (process) という概念を含意するとみなされる。このグループの動詞は行為の完了点を内包するか否かでさらに2つのグループに分けられる。*run, push a cart,* 等の動詞は行為を継続しても中断してもその意味が肯定される。このことから分かるように行為の完了は動詞の意味の成立に関与しない。これらの動詞は活動動詞 (Activity terms) と呼ばれる。理論上、行為は無制限に継続可能であるため、*For how long ~ ?* という質問形式で行為の継続時間が確認できる。

[1] *For how long did he push the cart?* (Vendler, *ibid.* p.100)

一方、*run a mile, draw a circle* 等の動詞は所定の行為が完了することによってその意味が肯定される。*run a mile* を例に取れば、1マイルの距離を走り終えることによって初めて動詞の意味が成立する。これらの動詞を完了動詞 (Accomplishment terms) と呼ぶ。このグループの動詞は行為の到達点を内包するため *For how long ~ ?* とは相容れず、*How long did it take to ~ ?* と共起して、行為が完了するまでの必要時間を確認することが出来る。

[2] *How long did it take to draw the circle?* (Vendler, *ibid.* p.100)

Know, recognize のように *be+ ~ ing* と共起しないグループの動詞は行為が進行しないものとみなされる。このグループの動詞も行為の完了点を含意するか否かでさらに2つのグループに分けられる。*recognize, reach the top, win the race* 等の動詞は一瞬の間に生じる出来事を表す。これらの動詞は瞬間動詞 (Achievement terms) と呼ばれ、*At what time ~ ? / At what moment ~ ?* との共起により行為の生起した時間が確認される。

[3] *At what time did you reach the top ? - At noon sharp.*

[4] *At what moment did you spot the plane ? - At 10:53.*

(Vendler, *ibid.* p.102)

瞬間動詞も *It takes ~ to...* と共起は可能である。しかし、完了動詞と組み合わせられた場合、この時間表現は行為が終了するまでの所要時間を表すのに対し、瞬間動詞では出来事が生起するまでの所要時間を表すという違いがある。

[5] *It took him twenty seconds to draw the circle.*

[6] *It took him three hours to reach the summit.*

(Vendler, *ibid.* p.101, p.104)

前者の例に於て、20秒は円を描き始めてから描き終わるまでの時間を示し、後者の例に於ける3時間は山に登り始めてから登る行為が終わるまでの時間を示す。「頂上に到達する (*reach the summit*)」という行為は「山に登る」行為を前提としているために、この行為が完了することによって初めて動詞の意味が生じるのである。

Be+ ~ ing と共起しない動詞のうち、*know, love, believe* 等のグループは短期間または長期間にわたって継続する行為を表す。これらの動詞は状態動詞 (State terms) と呼ばれる。動詞の表す事象が継続しうるため、*For how long ~ ?* によって事象の継続時間を確認することができる。

[7] *For how long did you love her ? - For three years.* (Vendler, *ibid.* p.103)

人・事物の性質を表す *be + 形容詞* (ex. *married, present, hard, yellow*) や *Do you smoke ?* のように動詞が習慣を表す場合も、事象が進行しないことから状態動詞に分類される。

Vendler は状態動詞と瞬間動詞の補足説明として、これらの動詞が *deliberately* や *carefully* など意思を表す副詞と共起しにくいことも指摘している (**know deliberately, *recognize carefully*)。

動詞が表わす意味特徴を他の文の構成要素との共起関係によって明らかにしていく Vendler の動詞分析の方法は、その後の動詞の意味論研究に多大な影響を与えた。英語だけでなくフランス語動詞の意味分析にも Vendler の手法は応用されている。例を挙げると、J. Hoepelman & C. Rohrer (in *La Notion d'aspect*, 1980), M. Wilmet (ibid.), C. Vikner (1985), R. Martin (1988), L. Gosselin (1996) 等の研究がある。これらの研究では、Vendler と同様に動詞グループはその意味特徴にしたがって4つのカテゴリーに分類され、それぞれのカテゴリーの意味特徴は *être en train de + inf.*, *en +N temps*, *pendant +N temps* など他の文構成要素との共起関係により確認されている。この他にも C. Fuchs, L. Gosselin et B. Victorri (op. cit.), A. Borillo (1991) 等、フランス語動詞の意味論に関わる事象を分析する多くの研究で、Vendler の4つのカテゴリーは分析の基本的枠組として用いられている。

しかし一方で、Vendler の動詞分類は理論的精密さには乏しく、カテゴリーの意味特徴、共起テストと意味特徴の関係の図式化ともに明確な言葉で定義されていない。上記の研究でも、細部の分析方法については異なる点も多く、間接的にせよ Vendler の方法論は再検討されている。また、Vendler の影響を受けたフランス語動詞研究の方法論に対する指摘も少なくない。以下の部分では、これらの研究の成果をまとめて動詞の意味分析の問題点を整理することにする。

2. 動詞グループの意味分析の問題点

2.1. カテゴリーの定義

Vendler の動詞分類の軸は *be + ~ ing* との共起性であることは先に述べたが、その鍵となる「進行」という概念があいまいで、その結果意味カテゴリーの定義にも矛盾が生じている。そもそも進行とは開始から終了にいたるまでの物事の変化を前提として定義されるはずである。*Be + ~ ing* と共起しない状態動詞グループが、状況が変化しないという意味で「進行」という概念と対立するのは当然だが、瞬間動詞については事態が異なる。このグループの動詞は *be + ~ ing* と共起しないという理由で状態動詞と同じ「状況が進行しない」グループに分類される。しかし行為の完了点を内包することから分かるように、瞬間動詞が表す事象は状況の決定的変化によって発生する。つまり「進行」も「瞬間」もともに変化を含蓄するわけであるから、「進行」という概念では、このような「継続性がないが変化を表す」瞬間動詞の意味を正確に定義し得ない⁵⁾。また、Vendler の動詞分類では意味カテゴリー自体の定義が明確になされておらず、しばしば動詞グループの意味特徴は共起テストの内容によって説明されている。

Vendler 以後の研究では各動詞グループの意味特徴はより厳密に定義されている⁶⁾。Wilmet (1980) はまだ「進行」という概念を用いている。しかし、この概念が用いられるのは状態動

詞の「(事象の) 始めから終わりまでまったく進行しない」という定義に於てのみである⁷⁾。未完了動詞、完了動詞、結果動詞⁸⁾ はいずれも「出来事 (= événement)」と定義され、それぞれの違いは事象の開始点と終了点との関係によって表される。すなわち未完了動詞は行為の開始点のみ含意し、完了動詞は行為の開始点から完了点までを表し、結果動詞は行為の開始点が完了点と重なるような事象を表すのである⁹⁾。

Vikner (op. cit.), Martin (1988), Gosselin (op. cit.) はさらに進んで、意味素分析を応用して動詞グループを定義しようと試みる。用いられる概念は研究者によって異なる。Vikner は点括性 (ponctualité)、不均質性 (hétérogénéité)、動性 (dynamisme) の3つの概念を用いる。点括性とは事象の時間的広がりに関わる性質である。動詞の表す事象が点括的であるという時、その事象は時間的広がりがないものとして捉えられることになる。不均質性は事象の進行状況の性質を表す。不均質な事象は *Elle a bu deux tasses de café* のように行為が終了することによって始めて動詞の表す状況が成立する。故に *courir* という動詞のように、事象全体と事象の一部が同じ文 (ex. *Elle a couru*) で表されることはない。Martin の分析では動性 (dynamicité)、境界 (bornage)、移行性 (transitionalité)、瞬間性 (Momentanéité) の4つの概念が用いられる。瞬間性は点括性と同様、事象が開始・終了などの局面に分割できないことを表す。境界は完了点に関する概念であり、境界のある事象は行為の完了点を内包する。*Je suis à Paris jusqu'à 15 août* のように、動詞の表す事象そのもの (être à Paris) に完了点が含まれなくても、時間限定など文の他の要素が行為の終了点を示す場合は境界が設けられる。移行性は状態の変化を表す概念である。ある動詞の事象が移行的であるとは、*naître* のように動詞がある状態から別の状態への変化を表すことを意味する。一方 Gosselin は境界 (bornage) と変化 (changement) という2つの概念を援用する。Gosselin のいう変化は多義的概念で「安定したある状況から別のある状況への移行、または2つの状況の間に決定的な変化をもたらさない、ある状態が中断され乱されること¹⁰⁾」と定義される。前者の変化を核的变化 (changement atomique) といい、後者の変化は一連の変化 (série de changements) という。境界という概念にも下位区分があり、動詞の表す事象そのものが完了点を内包する場合は内部境界 (bornage intérieur)、*pendant + N temps* のように状況補語等によって行為の終了点が設けられうる場合は外部境界 (bornage extérieur) と説明される。

これらの概念で表される性質の有無を調べることによって、各動詞グループは、直感的な認識を超えた、意味特徴の集合体として表されることになる。以下の表に上記3人の研究者が定義した4つのカテゴリーをまとめて紹介する。Vikner がカテゴリーの説明に使う用語は Vendler のものとは異なる¹¹⁾ が、便宜上 Martin, Gosselin と同様の用語を使用する。

各動詞グループの意味特徴

動詞グループ	意味特徴		
	Vikner	Martin	Gosselin
状態 ex. <i>savoir</i>	点括性(-) 不均質性(-) 動性(-)	動性(-) 移行性(-) 瞬間性(-) 境界性(±)	変化(-) 境界性(-) または外部境界
活動 ex. <i>marcher</i>	点括性(-) 不均質性(-) 動性(+)	動性(+) 移行性(±) 境界性(-) 瞬間性(-)	一連の変化 外部境界
完了 ex. <i>courir 100 mètres</i>	点括性(-) 不均質性(+) 動性(+)	動性(+) 境界性(+) 瞬間性(-)	一連の変化 内部境界
瞬間 ex. <i>atteindre le sommet</i>	点括性(+) 不均質性(+) 動性(+)	動性(+) 境界性(+) 瞬間性(+)	核的变化 内部境界

上の表で比較すると直接の対応関係は Vikner と Martin の間に点括性（瞬間性）と動性が、Martin と Gosselin の間に境界性（Gosselin の場合は内部境界）があるだけで、意味グループの定義の仕方は三者間でかなり差があるように見える。しかし、それぞれの概念を詳細に分析すると、いくつかのものには類似点が見られる。Gosselin のいう一連の変化は「ある状態が乱される」と定義されている点からみて、状態性に対立する動性に相当するものと考えられる¹²⁾。核的变化はしたがって動性と瞬間性が組み合わされたものだと考えられる。Vikner のあげる不均質性は一見すると変化という概念に近いようにおもわれる。だが、その意味の本質は事象内部における完了点の有無にかかっており、境界性と深く関わっていることがわかる。

最後に Martin の移行性について述べよう。行為によって引き起こされる主体または客体の状態変化は動詞構文を行為項との関係において分析する場合には重要な指標となる。アスペクト分析においても、事象が完了した結果生じる状態 (*état résultant*) を展開局面の延長として分析対象にすることがある¹³⁾。しかし、Vendler の意味分析は事象そのものの展開局面を（展開可能か否かを含めて）分析するものであり、展開後の状態は分析対象とはみなされない。したがって移行性は有効な指標とはなり得ない。

2.2. 共起テストの性質と役割

Vendler の動詞分類では *Be + ~ ing* を中心に、2種類の時間表現 (*For how long ~ ? / How long did it take ~ ?*)、さらには補足的に副詞の性質（意志的 / 非意志的）が動詞分類の基準として用いられている。*Be + ~ ing* と時間表現は動詞事象の展開局面（継続 / 完了）を特定することから考えて、動詞の内的時間の特徴を明示するのに適した共起テストといえる。一方、意志的・非意志という基準は、R. Martin (1988) が指摘するように、叙法的なものであり、動詞が内包する時間の図式を描く研究の目的には合致しない¹⁴⁾。しかし、後の研究ではこの点が見直されておらず、むしろ Vendler の方法論を発展させる目的から、共起テス

トの種類は増える傾向にある。例えば、Hoepelman & C. Rohrer (op. cit.) では、開始、継続、終末等の事象の局面を表す表現 (*commencer à ~*, *être en train de ~*, *finir de ~*)、時間表現 (*en + N temps*, *pendant + N temps*)、意志をあらわす動詞句 (*persuader à ~*, *forcer à ~*) と副詞 (*délibérément*, *volontiers*)、動詞時制形 (半過去、単純過去)、命令法、アスペクト的性質をもつ副詞 (*déjà*, *encore*, *ne ~ plus*) 等多種多様な要素を意味グループ認定の指標として用いている。Wilmet (1980) でもほぼ同様の共起テストが用いられる。両者ともにカテゴリーの意味説明の補足として共起テストを列挙するにとどまり、共起テストの役割、すなわち、何故、任意の共起テストによって任意の意味特徴が判別されるのかについてはほとんど言及していない。

その後の研究では Vikner のように2種類の時間表現 (*pendant + N temps*, *en + N temps*) で活動動詞と完了動詞の判別だけを目的にしているものもあるが、主として動詞事象の意味特性と共起テストの関係を明確に表そうと試みている。R. Martin (1988) は時間表現、事象の局面を表す動詞句等9つの共起テストを挙げ、それぞれが動詞グループを構成する境界性、移行性、瞬間性のいずれに関わるのかを明示する。境界線を有する事象は *en + N temps*, *mettre + N temps à ~* のように事象の終了を示す時間表現や *achever de ~* と共起する。また *Maintenant que + 複合過去の形式* で書き換えることが可能である。

[8] Il trace un cercle en quelques secondes

[9] Maintenant qu'il a tracé un cercle (Martin [op. cit.], p.5)

移行的事象は能動態から受動態への書き換えが可能になる。

[10] L'Ambassade est évacuée [現在もそのような行為が行われているという意味で]

(Martin [ibid.], p.5)

瞬間的動詞事象は継続を表す表現とは適合しない。すなわち、*pendant + N temps*, *achever de ~*, *cesser de ~*, *continuer de ~* とは共起しない。

[11] * Il atteint le sommet pendant deux heures

(Martin [ibid.], p.6)

L. Gosselin (op. cit.) は Martin よりさらに一歩進んで、共起テストに用いる要素自体の意味特性を解析し、それと適合する動詞事象の意味特徴並びに、テストの結果判別されるカテゴリーを示す。Gosselin が用いる共起テストは事象の展開局面と時間表現に関する5つ (*être en train de ~*, *pendant + N temps*, *en + N temps*, *mettre + N temps à ~*, *à + N temps* のように

一時点を表す状況補語) である。*Être en train de* ~が表す行為は未完了で一連の継続的变化を示す。故に活動動詞や一部の完了動詞のグループと共に用いられるが、変化を表さない状態動詞や継続性のない行為を表す瞬間動詞グループとは相容れない。*Pendant* + N *temps* は動詞事象に外部から境界線をもうけ任意の継続時間を付与する。一方 *en* + N *temps* / *mettre* + N *temps* à ~ は事象に内在する境界点を示し事象完了までの継続時間を表す。従って前者は活動動詞グループのみと後者は完了動詞グループのみと共起する。*À* + N *temps* は文頭に置かれる場合をのぞいては動詞事象の瞬間的な変化を表し、瞬間的動詞事象と共起する。

[12] Luc rentra à 8h35

(Gosselin [op. cit.], p.61)

Martin の研究の場合、先に述べたように移行性という概念そのものが四分類の意味分析に関与的ではないため、それに対する共起テストの有効性を問うことはできない。その他については、テストの数と種類は若干異なるものの Martin, Gosselin 双方ともにテスト自体の性質と動詞の意味定義に関わる概念の関係を的確に示している。あえて言えば、共起テストとそれぞれの動詞事象の意味特徴及び動詞カテゴリーという三者の因果関係を明示している点において、Gosselin の分析はより体系化されているといえる。

2.3. 分析対象と分析レベル

動詞グループの研究に於ける最後のポイントは分析対象に関わる。多くの研究者が指摘していることであるが、Vendler の意味分類の対象になるのは動詞そのものの意味ではない¹⁶⁾。*Draw a circle, write a letter, reach the summit* のように多数の完了動詞や瞬間動詞は補語を伴わないとその意味が確定されない。また、Vendler 自身も認めているように、彼の動詞分類では一つの動詞が他の要素との関係で二つのカテゴリーに分類されることがある。例えば活動動詞に分類される *smoke* が習慣を表すと状態動詞になり、逆に状態動詞に属する *think* は *think about* になると活動性を表し、*be*+ ~ *ing* と共起する (ex. *He is thinking about Jones*)。このことから分かるように、真の意味分析の対象となるのは、目的補語、状況補語等の情報を含めて動詞が文中で表す意味、すなわち発話の事行¹⁷⁾ である。

動詞以外の言語要素の影響によって同じ動詞を含む文が別の意味カテゴリーに分類されることは多くの研究で報告されている。Hoepelman & Rohrer (op. cit.), Wilmet (1980), Vikner (op. cit.) は補語の有無だけでなく、主語や目的補語の性質 (単数 / 複数の違い等) やその他の補語の性質によって同じ動詞を含む文の意味が変化することを指摘する。以下に Vikner の例文を挙げる。

- [13] a. Une bombe explose (瞬間)
 b. Des bombes explosent (完了または活動)
- [14] a. Elle mange deux pommes (完了)
 b. Elle mange des pommes (活動)
- [15] a. Elle marche (活動)
 b. Elle marche jusqu'à la gare (完了) (Vikner [op. cit.], p.98¹⁸⁾)

例文 [13] では主語の、[14] では直接目的補語の限定詞の性質と数が文の意味を決定している。不定冠詞複数がつくことにより、事象が無制限に繰り返されうることになり、事象の完了点が消滅するのである。例文 [15] の b では場所の状況補語によって行為の完了点が示される。

比較的最近の研究では動詞句や発話の意味分析そのものより、発話の意味構築に関わる要素の分析に焦点が置かれている。A. Borillo (op. cit.) は動詞、動詞句、主語、動詞時制形、時に関する副詞句・節、文脈から得られる言語外情報の6種類の要素が発話の意味を決定するという¹⁹⁾。動詞句については動詞の語彙的意味の他に補語の有無とその性質が関わる。単数・複数の違いだけでなく限定の仕方(定冠詞・数詞・不定冠詞の違い等)も無関係ではない。主語についてもその性質、主語の限定の仕方が問題となる。動詞の時制形で最も関与的なのは半過去形と単純過去形で、前者は事行の完了点を消し未完了にする。一方、単純過去は状態を表す動詞句の事行の開始時点に焦点をあてることによって事象に動性を与える。以下に Borillo の例文を2つ挙げる。

- [16] Marie écrivait une lettre mais elle n'arriva jamais au bout
 [17] Jean ne lui adressa pas la parole. Marie fut étonnée
 (A.Borillo [op. cit.], p.99)

例文 [16] では手紙を書く行為は開始されたものの何らかの理由で中断され、*écrire une lettre* という事象が完了していないため、*Marie écrivait une lettre* の事行は未完了となる。例文 [17] では「驚いている状態」を表す *être étonné* が、単純過去によって事象の開始時点に焦点が与えられたことによって、*s'étonner* (驚く) と同じ意味になる。

Gosselin (op. cit.) はさらに詳細に各要素の意味特徴を分析する。例えば主語及び直接目的補語の限定の仕方については、定冠詞、数詞、所有形容詞、指示形容詞、不定冠詞単数がつく場合は動詞句の表す事行は完了し、逆に部分冠詞、不定冠詞複数、若干数の不定形容詞 (ex. *un peu de, beaucoup de*) がつくと事行は完了しない。しかし、*regarder une photographie* のように事行が可逆的であると、終了点を記す限定詞がついていても事象は完了したとはみなされない。また、習慣を表す発話 (ex. *Il mangeait en cinq minutes*) にみられるように、事

象が非限定的に反復される場合は *en + N temps* のような完了を表す時の表現と共起しても発話の事行は完了しない。その他の例としては、R. Martin (1988) から、事象が拡大して捉えられると発話レベルでは *sortir* のような動詞の瞬間性が失われ、完了までの継続時間を表す時間表現と共起することが報告されている (ex. *Le papillon a mis une heure à sortir du cocon*)。

以上の考察を総合すると、発話の事行は特定の言語要素の語彙的意味ではなく、発話に関わる要素すべての意味特徴の総和から生じていることがわかる²⁰⁾。もちろん発話に関与する要素の多さを考慮すると、実際の事行分析は煩雑さを極めることになろう。これを避けるために動詞ないしは動詞句の事行を単独に分析することは可能である。しかしながら、時間表現や動詞句を用いた共起テストは発話レベルにおいてしかその機能を果たすことが出来ないのも事実である。動詞句の事行を基準にする場合でも、動詞句と発話の事行のタイプのずれを考慮し、冠詞・時制形等の、ずれを引き起こす言語要素の役割を体系的に提示する必要があるだろう。

3. おわりに

以上、Vendler に始まる動詞分類の方法論の再検討を通して、フランス語動詞事象の意味分析がいかに発展してきたかを見てきた。Vendler が提示した状態、活動、完了、瞬間のカテゴリーは、現在まで広くフランス語動詞事象のアスペクト的意味分析の分類枠として用いられており、その有用性は疑う余地がない。しかしながら、彼の方法論にはあいまいな点も多く、*be + ~ing* との共起性によって導き出した各カテゴリーの意味特徴が概念的に矛盾点している、共起テストがアスペクト的性質に統一されていない、さらには分析対象(発話の事行)と分析レベル(動詞)が一致していない等の問題点が見られた。Vendler の四分類をフランス語動詞事象の分析に応用した研究では、分析基準が整備されより体系的な事象の意味分析が試みられている。本稿ではその内容をカテゴリーの定義、共起テスト、分析対象と分析レベルの三つに分けて整理した結果、以下の内容が明らかになった。第一に、意味カテゴリーは直感的認識に頼って定義されることも多かったが、対立概念を用いて任意の性質の有無を調べることによって、弁別的意味特徴の集合として客観的に表されうる。第二に、共起テストはカテゴリーそのものの説明と区別されるべきであり、本来の機能は、動詞事象が表す概念特徴との意味的共起性または非共起性によって事象のタイプを判別することにある。第三に、動詞事象の分類で真の分析対象となるのは統辞論的な意味における動詞ではなく、動詞を含めた言語要素が文脈に応じて表す意味である。発話のレベルでは言語内外の様々な要素が意味構築に関与しており、事行のタイプはこれらの要素の意味特徴が総合された結果判別される。

結論として言えるのは、動詞事象の事行分析は一般的に考えられている意味論の枠を超えて、発話理論との関連性において考察しなければならないということであろう。動詞句の意味的特

徴は直感的に認識可能であるが、共起テストによってその概念特徴を明示しようとするれば発話そのものを扱わなければならない。そこでは言語外的事象を表す動詞ないしは動詞句と主語の選択²¹⁾、冠詞や時制形による名詞や動詞事象の限定等を含めた発話者の意味構築作業そのものが大きく事行のタイプを左右しうるからである。

注

- 1) P. Imbs (1960), R. Martin (1971) を参照。
- 2) C. Fuchs, L. Gosselin et B. Victorri (1991), pp.138 – 142. 参照。
- 3) J. François et L. Gosselin (1991), p.34 参照。
- 4) W. Chafe (1970) : *Meaning and the structure of language*, Chicago, University Press なお Chafe の研究については C. Vet (1980), pp.59 – 60 を参照した。
- 5) R. Martin (1988) の指摘を参照。
- 6) J. Hoepelman & C. Rohrer (ibid.) は例外的にカテゴリーの意味特徴をほとんど説明していない。
- 7) Wilmet (in *La Notion d'aspect* 1980), p.61 参照。
- 8) 状態動詞、未完了動詞、完了動詞、結果動詞は本文ではそれぞれ *verbes statifs*, *verbes imperfectifs*, *verbes perfectifs*, *verbes conclusifs* を訳したものである。
- 9) Wilmet (in *La Notion d'aspect* 1980), pp.61 – 63.
- 10) Gosselin (op. cit.), pp.50 – 51.
- 11) Vikner は *Etat*, *Procès*, *Événement étendu*, *Événement instantané* という用語を用いている。C. Vikner (1985), p.96.
- 12) Gosselin 自身、一連の変化を動性 (*dynamicité*) と表している場合もある。Gosselin (op. cit.), p.43.
- 13) 例えば *guérir* のような動詞は完了することによって「回復した (病気ではない)」という別の状態を生み出す結果動詞である。
- 14) R. Martin (1988), p.4.
- 15) 詳しくは Gosselin (op. cit.) pp.56 – 62 を参照。
- 16) 例えば Hoepelman & Rohrer (op. cit.), p.120, R. Martin (1988), p.6 を参照。その他 A.-M. Dessaux-Berthonneau (1985) も動詞のみを対象とした意味分析の方法論を批判している。
- 17) 事行 (*procès*) の定義は研究者によって異なり、少なくとも 3 通りに分けられる。
 - 1) 動詞の表す意味内容 : M. Arrivé, F. Gadet et M. Galmiche (1986).
 - 2) 動詞句 (動詞 + 補語) の表す意味内容 : J. François et L. Gosselin (1991) et L. Gosselin (op. cit.).
 - 3) 発話 (主語 + 動詞 + 補語 + その他の発話要素) の表す意味内容 :
R. Martin (1988), C. Fuchs, L. Gosselin et B. Victorri (1991)
- 18) 注 11) で取り上げたように Vikner の用語は Vendler のものと異なる。

- 19) A. Borillo (op. cit.), pp. 98 – 101.
- 20) C. Fuchs, L. Gosselin et B. Victorri (op. cit.), p.154, L. Gosselin (op. cit.), p. 14. 参照。
- 21) 言語外的事象の捉え方によって事行のカテゴリーは異なりうる。例えば、同じ言語外的事実を目にして *être en marche* と表すことも *marcher* と表すことも出来る。前者の場合、動詞句のカテゴリーは「状態」であり、後者は「活動」である。

参考文献

- ARRIVE, M. GADET, F. et GALMICHE, M. (1986) : *La Grammaire d'aujourd'hui : guide alphabétique de linguistique française*, Paris, Flammarion, 719p.
- BERTHONNEAU, A. – M. (1991) : « Pendant et pour, variations sur la durée et donation de la référence », *Langue Française*, 90, pp.102 – 104
- BONNARD, H. (1988) : « Verbe et temps », *L'Information Grammaticale*, 38, pp.3 – 6
- BORILLO, A. (1991) : « De la nature compositionnelle de l'aspect », *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg – Nancy, pp.97 – 102.
- COMRIE, B. (1976) : *Aspect*, Londres, Cambridge Textbooks in Linguistics, 142p.
- DAVID, J. et MARTIN, R. éds. (1980) : *La Notion d'aspect*. Actes du colloque organisé par le Centre d'Analyse syntaxique de l'Université de Metz, 18 – 20 mai 1978, Paris, Klincksieck, 248p.
- DESCLES, J.-P. (1991) : « Archétypes cognitifs et types de procès », *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg – Nancy, pp.171 – 195.
- DESSAUX-BERTHONNEAU, A.-M. (1985) : « Niveaux et opérations dans la description des compléments temporels », *Langue Française*, 66, pp.20 – 40.
- DUBOIS, J., GIACOMO, M., GUESPIN, L., MARCELLESI, C. et J. – B. et MEVEL, J. – P. (1994) : *Dictionnaire de linguistique et des sciences du langage*, Paris, Larousse, 514p.
- DUCROT, O. et TODOROV, T. (1972) : *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Seuil, 470p.
- FRANCKEL, J. – J. (1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Genève, Droz, 472p.
- FUCHS, C. (1991) : « Les typologies de procès : un carrefour théorique interdisciplinaire », *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg – Nancy, pp.137 – 169.
- FUCHS, C., GOSSELIN, L. et VICTORRI, B. (1991) : « Glissements de sens et calcul des types de procès », *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg – Nancy, pp.137 – 169.
- GOSSELIN, L. (1996) : *Sémantique de la temporalité en français*, Bruxelles, Duculot, 291p.
- GOSSELIN, L. et François, J. (1991) : « Les typosogies de procès : des verbes aux prédications », *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg – Nancy, pp.19 – 86.

- HIRASHIMA, H. (1999) : *Enseignement / apprentissage des temps verbaux dits 《passés》 et ses problèmes chez des étudiants japonais*, thèse de doctorat, Université Stendhal – Grenoble III, 590p.
- 泉邦寿 (1983) : 『日仏動詞の意味比較 —résultatif の問題—』, 日仏対照研究, pp.35 – 50.
- 町田健 (1989) : 日本語の時制とアスペクト, 東京, アルク, 173p.
- MAINGUENEAU, D. (1994) : *L' énonciation en linguistique française*, Paris, Hachette, 158p.
- MARTIN, R. (1970) : *Temps et aspect, Essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck.
- MARTIN, R. (1988) : < Temporalité et < classe de verbes >> , *L'Information Grammaticale*, 38, pp.3 – 8.
- POTTIER, B. (1992) : *Sémantique générale*, Paris, Presses Universitaires de France, 447p.
- 田中春美 (1988) : 現代言語学辞典, 東京, 成美堂, 930p.
- TREVISE, A. (1990) : *Le prétérit ce passé pas si simple*, La Garenne-Colombes, Editions Européennes Erasme, 128p.
- VENDLER, Z. (1967) : *Linguistics in Philology*, Cornell University Press.
- VET, C. (1980) : *Temps, aspects et adverbs de temps en français contemporain*, Genève, Droz, 185p.
- VIKNER, C. (1985) : < L'aspect comme modificateur du mode d'action : à propos de la construction être + participe passé > , *Langue Française*, 67, pp.95 – 113.
- WEINRICH, H. (1989) : Grammaire textuelle du français, trad. fr., Paris, Didier/Hatier.
- WILMET, M. (1988) : < Le temps linguistique > , *L'Information Grammaticale*, 38, pp.6 – 10.